

---

# Tangerine Voice

日野五十鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T a n g e r i n e   V o i c e

### 【Nコード】

N 5 5 7 6 J

### 【作者名】

日野五十鈴

### 【あらすじ】

勤め先の倒産により職を失った里崎実環さとざき・みわのもとに新たに舞い込んできた仕事は、イケメンだけど超ド音痴！ な俳優・成瀬夕月のゴーストシンガーだった！！ ドキドキありラブラブありの芸能界裏側（推測）ストーリー！

### 【12話完結シリーズ第1段！！】

## タンジェリン・ヴォイス（１）

一面グレーの高速道路を、色とりどりの車が忙しく行き交う。

そのうち１台の運転手、サトザキ・ミコ里崎実環は、ラジオから流れてくる声に耳を傾けていた。

「…それではリクエストにお応えしまして、曲は１５年前にデビュー１年半にして電撃解散した伝説のバンド、ハーメドの『永遠に』です。どうぞ！！」

「……………」

キーボードの繊細な旋律から入って、次にドラム、ベース、ギターが伴奏に“厚み”を加える。

そしてその上から、ボーカルの甘く切ない男声が車内に響き渡った。

「…君と一緒に生きてゆくなら…守り続けたい明日がある…」

実環はそのボーカルの声に合わせて口ずさむ。

それはラジオから流れてくるものと同じくらい、甘く切ない歌声だった。

…時は1ヶ月前に遡る。

「それでは2人の幸せを祝して、カンパニー!!」

実環たち仲良しグループはアパートの一室に集まって、手に手にグラスを持って乾杯した。

友人の結婚おめでとうパーティーというやつだ。

実環はいわゆるニートだった。短大を卒業してちゃんと就職したのだが、この不況の煽りを受けて勤めていた会社が倒産し、社会生活2年目にして失業保険で生活するハメになってしまったのである。不況のためか次の就職先も決まらず、よって昔の仲間が集まるホームパーティにも時間があるので出席できたのだが、今になって考えてみれば、これこそが運の尽きだった。

最初は当たり前のように新婦の馴れ初め話から始まったのだが、会話は次第に『余興で誰が何を歌うか』という話になり、結果『1番歌の上手い実環がソロで結婚ソングを披露する』ということになったのだ。

「私にそんな大役、務まるかしら…」

「そんなに心配しなくても…だって…ねえ？」

皆は目を合わせながらクスクス笑う。

「短大時代、合コンで男全員カラオケで泣かしたのは誰だったかしら？」

「あわわ忘れてって言ってるじゃんー！！」

事実、実環は合コンで男性陣をことごとく（歌で）泣かせてきたのだ。原因のひとつは、あまりにも実環の歌声がラブバラード向きで感動的だったから。もうひとつは、男でもなかなか歌いこなせない男性シンガーの名曲を、実環がいとも簡単に歌いこなしてしまうからだった。

「実環が歌えば新郎もイチコロで泣くよ」

新婦はともかく、新郎を泣かして意味があるのか？ 新婦友人代表なのに。

「あ、ねえ見て見てー！！『3分偉人伝』の俳優3人組、歌手デビューだって！」

「マジ！？」

流行に敏感な若い女たちは、BGM代わりにつけておいたテレビに一斉に群がる。

『クイズ3分偉人伝！』はその局の看板番組で、毎回高視聴率を記録する超人気番組だ。中でもレギュラーの3俳優の人气が高く、この春ユニットを組んで歌手デビューするという。

「えーアタシ偉<sup>イコ</sup>せっち好きなんだよねー。絶対CD買っ！」

「偉世<sup>マサル</sup>つち可愛いもんねー。でもわたしはやっぱり、大さんかなあ」

「大さんだって！ あいつ妻子持ちのオッサンじゃん」

「そこうるさい」

「やっぱり、夕月<sup>ユツキ</sup>くんでしょう。何だかんだ言って今1番人気の若手俳優だし」

各々の好みをよそに、テレビの向こう側で唐川<sup>カラカワ・イヨ</sup>偉世、渡辺<sup>ワタナベ・マサル</sup>大、成瀬<sup>ナリセ</sup>夕月<sup>ユツキ</sup>がにこやかに手を振っていた。

## タンジェリン・ヴォイス（2）

（…困った…）

ニシオカ・ミネフミ  
西岡嶺文は親族待合室で頭を抱えていた。彼の長い音楽活動の中、今だかつてこんな難しい仕事を引き受けたことはない。

（…渡辺は文句なし…唐川も充分イける…。…あとは…）

西岡の頭の中で、あの声がこだました。

『言つときますけど、おれ、歌ヘタなんで』

「…成瀬なんだよなあ…」

「何か言いました？ 叔父さん」

西岡は甥に『なんでもない』と言った。そうだ。今日は甥の晴れがましき結婚式なのだ。祝つてやりたい気持ちは十二分にあるのだが、彼の心はどんより曇り空だった。

数日前、親睦を通してカラオケ店で“仕事”していたときは、比較的な西岡も樂觀視していた。

年齢のせいでリズム感を心配していた大は、ソロデビューしても差し支えないほどの歌唱力の持ち主だったし、逆に若すぎて声量を心配していた偉世は、グループで活動するには何の問題もない優等生だった。

だが、夕月ときたら。

音感、リズム感、声量、共に最悪。ド えもんのジャ アンとタメで張り合えるどころか、ゴジラがお経を唱えてる方がはるかにマシだ。それくらい酷かったのだ。デビューが決まってから今まで個人レッスンしても暖簾に腕押し糠に釘、何ひとつ改善しないまま今日に至った。

(…こんなことしてる場合じゃないんだけどなあ…)

式の方は何の問題もなく着々と進み、ついに新婦友人代表挨拶となった。

話を聞いている分には、あの里崎という若い女性が一曲歌うらしい。

(…あの娘が歌上手かったら、成瀬の代わりに歌わせようかな…なんてな…)

いや、まさかそんな。若い女性が成年男子の代わりに歌を歌うなんて出来るわけが…。

「…君と一緒に生きてゆくなら…守り続けたい明日がある…」

瞬間、西岡は我が耳を疑った。



この曲を歌ってるバンド…“ハーメド”のボーカル『Natsu』は、百年に1人と謳われた奇跡の歌声の持ち主だ。素人が安易に歌えば、確実にボロが出る。しかも『Natsu』は男なのだ。

だが、この娘ときたら。

リズム、音、声量、共に完璧。気がつけば会場内を涙で埋め尽くしている。なんとすれば新婦どころか、我が甥まで涙している。どっちの意味で泣いてるのは考えたくない。

「『大好きだよ』…」

…拍手が沸き起こるまでに、感動のあまりしばらくの時間を費やした。

西岡は声をかけるべきか迷っていた。確か彼女は名前を『里崎』と言ったか。

（まさか…いや、でも面影はある…）

もし予想が当たっていたら…そしてもし彼女を夕月の代わりに使っ

たら…。

『あいつ』の耳に入りやしないか…？

「お幸せにね」

そう言っただけで彼女は会場を後にしようとした。

西岡は焦った。

（こここの機会を逃したら…確実に次はない！！）

彼女を夕月の『ゴースト』として捕らえなければ！

「もももしそこのお嬢さん！！」

「きゃあああああああ！！」

…あまりの挙動不審ぶりに、西岡は瞬時、変質者扱いされた。

### タンジェリン・ヴォイス(3)

レコーディングが終わったあと、一同はほっと溜め息をついた。

中でも一番最初に反応を示したのは、最年少の唐川偉世だった。

「すごいですー！ え？ 本当に素人の方なんですか！？」

あまりの感激ぶりに、ホットプレートのエビみたいにピョンピョン跳ねている。とても19歳の男の子がとる行動だとは思えない。

「本当ですね。素人とは思えない…」

一方紳士然と言葉を挟んできたのは最年長の渡辺大だ。

戦隊モノで一躍有名になり、今や若い奥様方のアイドル的存在だが、残念ながらすでに妻子持ちだ。ちなみに年齢は27歳。

「路上でライブやってたとか、そういう？」

「いえ、以前は会社で事務してましたけど…」

以前は、というところで視線をさまよわせる。悲しくも今は失業保険で生活してるニート状態。

(…ふ…なんてったって、家計がかかってるもの)

実環は崖っぷちの必死の形相で迫ってきた西岡の顔を思い出した。

『どーかどーかどーか！！ 成瀬のゴーストシンガーになってやってくださいッ』

…あの叫びが耳にこびりついて離れない。

（…そりゃねー…あの力才であの歌声って…ギャップがあるどころじゃないわよあれは…）

一度だけ、夕月の歌を聞いたことのある実環だが、聞いた瞬間、凍りついた。

ド えもんに例えるなら出 杉くんがジャ アンの声で歌ってるよ  
うなものだし、カメラがオペラをやってる方がはるかにマシだ。それくらい、彼の見た目と歌声にはギャップがあった。

一方で実環といえば、中学・高校時代は合唱部の大会にスカウトされ、合唱コンクールの自由曲、『流浪の民』ではソプラノ・ソロを担当したこともある。今回も基本的なレッスンを受けただけで、あっという間にレコーディングだ。ありえない。

（…どうりであれだけのお金を出すわけだわよ…）

そしてあの音楽プロデューサーはさめざめと泣いた。

『もうもう君しかいないんだあッ。君の歌を聴いてこれと思った。ただの歌の上手い人じゃだめなんだ！ 夕月の声に近く、時間の自由がきき、何より音楽を心から愛してくれる人でなければ』

…実環はその勢いと高額報酬に根負けした。

実環はよくよく考えた結果、そう悪くない話なのではないか直した。つまり、ちよつと変わった長期のアルバイトと考えればいい（と無理矢理思い込むことにした）。

しかしである。

「それくらい、できてくれないとおれが困るんだよ。ゴーストシンガーさん」

壁に背を預けてのんびんだらりとしていた夕月に言われ、実環は堪忍袋の緒が纏めてブチブチと切れるのを感じた。何様だ、コイツ。

「…あんたのアイドル性を保つために、代わりに歌ってあげてるんでしょがッ」

夕月は前髪をさらりと払った。

「それが金を貰うほどのものか。親のスネかじってるニートのくせに」

「失礼ねっ！ ハローワークにはちゃんと申告してるわよ！ それに言っときますけど？ 家賃、食費、光熱費は全部自分で出してるのよっ」

ニートと言ってもそれは名ばかりで、彼女の父母は仕事の都合上世界中を飛び回っており、滅多に家には帰ってこない。よって実環は失業保険で独り暮らしをしてみると言っても過言ではなかった。

まあまあ、と2人の間に大が仲裁に入る。

「これから長い付き合いになるんだから、仲良くしようよ。それに、  
同い年でしょ？ 君たち」

「……………」

「……………」

…ええええええーっ！？

「同い年なのか！？」

「に、21歳なの！？」

とてもそうは見えない、と異口同音。

## タンジェリン・ヴォイス（４）

彼等は、グループ名を『ばんぺいゆ』という。

由来は、番組でゲストが持ってきてくれたデカイみかんだ。

「うわー大きなミカン」

はしやぎ騒ぐ偉世。

「偉世っち、これはボンタンっていうんだよ」

そう諭す大。

「バンペイユともいうんですよ、これ」

ゲストさん。

「ああ、じゃあ」

司会者。

「渡辺と唐川と成瀬でグループ名、バンペイユ」

いいなあ、と1人悦に入る司会者。

「グループ名『ばんぺいゆ』…いいなあ」

そんな冗談からグループ名が決まってしまいましたとき。

「晩<sup>バン</sup>です」

「白<sup>ベイ</sup>です」

「柚<sup>ユ</sup>です」

上から順に大、偉世、夕月である。

それはともかくとして、今日はCD発売直前企画、番組内での生歌披露収録の日だった。

もちろん実環も舞台裏でスタンバってる。

「うー、信じらんない。なんでこんなことに」

「仕方ないでしょ、実環ちゃん。成瀬のゴーストやるって、承諾しちゃったんだから」

実環は舞台裏で夕月の出番を待っていた。もちろん代わりに歌うためである。



「だからって舞台裏…ドラマDVDの“撮影の裏側”でしか見ないような舞台裏…」

舞台裏に潜入するのも初めてなら、テレビ局に来るのも初めてなのだ。こういうところは夕月を尊敬する。こんなスタッフや観客の大勢いる中で、お芝居なんてとんでもない。

「…う…私、吐きそう…すみません。お手洗い行ってきます！」

実環は緊張のあまりその場から脱出した。

「あ」

「あ」

トイレから戻る途中、エレベーターの前で天敵・夕月と鉢合わせてしまった。

どうやらあちらも休憩に入っただらしい。

(…う…なんか気まずいなあ…)

「ふん」

と、隣から高飛車な声が聞こえた。

「調子ぶっこいてんじゃねーぞ」

「…え…？」

実環は一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「それ、どーゆー意味よ…」

「気に入らねーんだよ！」

夕月は言い捨てるようにして言葉を放った。

「お前みたいなド素人が、おれの代わりに歌うなんてよー！」

「だっ、だって成瀬くんは…！」

「ちょっと歌が上手いくらいで、偉せつちにはベタベタされるし」

ドキッ。

「大さんにも太鼓判押されていい気になってるしょー！」

ドキドキッ。

「お前みたいな社会の負け犬が、楽に金稼いでると思うとムカつくんだよっ！ー！」

「……………ッ」

社会の負け犬…そう言われると反論できなかった。でも言いたいことはある。

「…そりゃ…私は成瀬くんから見たら…社会の負け犬かもしれないよ…。…でもっ」

ドアが開いた瞬間、キツとばかりに見返す。

「成瀬くんのような卑怯者よりマシだよ！ 不満があるなら初めから西岡さんに断ればよかったじゃない！！」

「んだとお！？」

閉まるエレベーター、女相手に手をあげる夕月。

「どういう意味だよそれ！？」

「そのまんまよ！…その手え離しなさいよっ！！」

その瞬間。

ガタン！ と急にエレベーターが動かなくなり、2人は少しの間、宙に放り出された。

「…いつ…てえ…」

「何なのよ一体…」

フッ、とエレベーターの明かりが消える。

「…え…？」

「なに…？」

夕月は全階のボタンを押した。しかしエレベーターが動く様子がない。

「っ、何なんだよ！」

今度は非常用ボタンを押して助けを呼ぼうと試みるが。

「…繋がらない…」

「うそ…それじゃ私たち…」

…2人はエレベーターの中に閉じ込められた。

## タンジェリン・ヴォイス（5）

夕月が帰ってこない。

「まあ、た成瀬王子さまの気儘が始まったか…」

「仕方ない。曲のシーンだけ最後に回して成瀬使わないシーンに行くぞ」

「…お客さん、焦らっしやいますね」

しよーがないだろう…スタッフの会話を聞いて、またか、と西岡は思った。と同時に嫌な予感がした。

実環も帰ってきてないのだ。

（…2人になにか、あったのかな…）

西岡の予想は、当たっていた。

「おい、開けよッ!」

夕月はドンドンと、開かないエレベーターの扉を乱暴に叩いていた。

「開けてんだよおッ!!」

今度は肩で体当たりした。しかし悲しきかな、止まったエレベーターは動く気配もない。

「ちよっ…成瀬くん！ 危ないよ、衣装汚れちゃうよ、それ以前に怪我しちゃうよ！」

実環の言葉を素直に聞いたわけではないが、夕月はエレベーターに手を付きずると崩れていった。

「何なんだよ…ちくしょうっ！」

「成瀬く…」

「この日のために一生懸命頑張ってきたんだ！ レッスンだって1度も休んだことない！ 誰か、誰か開けるよ！ 誰かあつ!!」

(…成瀬くん…)

夕月は扉をガリガリと掻くと、ちくしょうっ！ と呟いた。

「やっと…やっとステージの真ん中に立てると思ったのに…」

…ああ、そうか…と実環は思った。

この日のために、成瀬くんは長い間苦勞してきたんだもんね。

（まあ…歌は実を結ばなかったみたいだけど…）

…ただの嫌な奴じゃなかったんだ。

「……………。…遅い」

いくらなんでも遅すぎる。

「もう撮るシーンも尽きた…おい誰か！ 成瀬のいそつなところを  
しらみ潰しに捜してこい！」

「はい！」

その会話を聞いて、西岡は確信した。

（やっぱり実環ちゃんとなにかあったんだ！）

変な誤解するなよ。

「だれかー！ 助けてくださーい！ー！」

「おい」

扉を叩いて叫ぶ実環に、扉にもたれ掛かって座っている夕月は無感動に呼び掛けた。

「このエレベーター、スタジオから1番遠いんだ。こんなに時間食っちゃ誰も来やしないよ」

そして極めつけの一言を言った。

「諦める」

「…諦めたくない…」

ポツリと呟いた反論に、夕月は顔をあげた。

「…里崎…？」

「だってここで諦めたら、成瀬くんの努力が無駄になっちゃうもん！」

「里…」

「成瀬くんだけじゃない」

実環は汗だくの顔のまま微かに笑った。

「大さんと、偉世つちと、…私たちの、大事なデビューだもん」

「…里崎……。……」



そしてまた扉をバンバン叩く。

「誰か…」

「誰か来てくれーっ!!」

その声に実環は振り返った。

夕月が扉を叩いて大声で叫んでる。

「…成瀬くん…!」

「…お前が諦めてないのに、おれが諦めるわけにいかないだろう?」

そして俳優だからこそよく似合う、男前な笑みで付け足した。

「せーので一緒に声出すぞ」

「……。…うんっ」

「いたか?」

「ダメです。そっちは」

「いなかった。1番自信があったところだったんだけど…」

その場を重い空気が包む。

「…こうなったら、今日は歌の収録なしで切り上げますか？」

「…そうするしかないな…」

「……………」

そのとき、わざわざ階段を上ったらしきテレビ関係者が意味深なことを言った。

「だーめた。エレベーター動かねーよ」

「ここも古いですからねえ」

西岡はその会話を聞き逃さなかった。

「…まさか！」

西岡はエレベーターまで走り出した。

「西岡さん！？」

「大さんっ！！」

「偉世っち！！」

2人はせーので声を出し、扉をバンバン叩いた。それでも一向に助けが来る気配がない。

「ダメだ…誰も来ない」

疲れはてた夕月はずるずるとその場に崩れ落ちた。実環も喉の痛み思わず咳をする。

（…もうダメなのかな…）

実環は首にかけていたタオルに咳をこぼした。

「…あ…」

このタオルは…。

『実環ちゃん、これあげるよ。関係者限定の貴重品だよ』

それは『ばんぺいゆ』結成記念に作られたタオルの試作品。ミカンの模様に“ばんぺいゆ”の文字が刻まれている。

『すごいですー！ え？ 本当に素人の方なんですか！？』

『本当ですね。素人とは思えない…』

…歌うことが何より好きだった。

いつか人前で歌いたいと思っていた。

(…諦めたくないよお…っ)

実環はタオルに顔を埋めた。

そして、叫んだ。

「西岡さーんッ!」

「!!! 実環ちゃんの声だ!」

ちょうどそのとき、西岡がエレベーターの扉に耳を宛がっていた。

「やっぱりこの中だ! 至急関係者を!!!」

「はいっ!!!」

…そして間もなく。

2人の頭上から一筋の光が射し込んだ。

光は徐々に広範囲に渡り、エレベーターの上方にいたスタッフや西岡、それに報せを受けて駆け付けた大や偉世の姿が見えた。

「実環ちゃん！」

「夕月！」

まず夕月が先に救助され、彼の差し伸べた手を握って実環も脱出した。

「大丈夫か2人とも。怪我はないか？」

「はい。あ…」

実環は思い出した。あれだけガンガン体当たりした夕月は大丈夫なのだろうか。

「成瀬くん、怪我…？」

「ふん。お前に心配されるほどヤワじゃない」

「むっかー！ 何よ、心配して訊いてあげてるのに！！」

はいはいそこまで、と大が間に入った。

「怪我がないなら急ごう？ お客さん待たせたら失礼でしょ」

「うー、信じらんない。なんでこんなことに…」

「実環ちゃん、それ、さつきも聞いた…」

と、コーラスが流れてきた。

「あ。ほら、そろそろ出番だよ」

「もう分かってますってエー」

あれだけ不安の色が濃かった実環の顔が、マイクを持った途端、キラッとした表情に変わる。

結婚式で、レコーディングで。その横顔を見るたびに西岡は、今はどこにいても知れない『友』のことを思い出すのだ。

(…今回のこと…『あいつら』にバレなきゃいいけどな…)

「…もっと強く、なれたらいいね…きつと強く、なれる気がするよ…」

歌い終わった途端、お客さんから『きゃー』という歓声があがったのは言うまでもなかった。

## タンジェリン・ヴォイス（6）

時は流れ…。

「デビュー曲『晚白柚』が初登場売上第2位!？」

「しかも4週連続う!？」

すごい。企画モノにしては凄すぎる快挙だ。そこに丁度よく、喫茶店のマスター・大村八作氏オオムラ・ハツサクが、人数分のカフェラテを持ってきた。

喫茶・歌音カノン。そこはマスター大村と西岡が旧知の仲ということもあり、よく打ち合わせに来る店だ。芸能事務所も近いため、よく芸能人も訪れるという。しかし今は早朝のためか、西岡たち以外に客はいない。そこを狙っての打ち合わせだ。

店内にはマスター・大村と西岡プロデューサー、夕月のゴーストシンガー実環と、それに『ばんぺいゆ』の3人だけがいた。

「しかもしも、もう2曲目ができてるって!？」

「うん。…それで、ここからが本題なんだけど…」

西岡はニヤリと仕事人の笑みを見せた。

「ばんぺいゆ新曲発売を記念して、全国4ヶ所を回る計画があるんだ」

.....。  
.....。  
.....。

「……え……」

ええええええーっ!?

「全国を回るって、あの、ツアーですか？」

「そ」

「……『4人』で？」

「そ。ああ、もちろん実環ちゃんはホテル別室だけど」

これには夕月が突っ込んだ。

「なーんで里崎は個室なのに、おれ達は相部屋なんですか」

その言に実環はムツとした。

「なによ。その言い方」

「べつに間違っただけとは言っていない」



「くうく腹立つうその自分はお前なんかより数段上なんだぞって言い方が！」

「間違つてないだろ。おれは売れっ子の役者で、お前はプー太郎」

「失礼ね！好きでプーになったわけじゃないわよ！！そこまで言うなら…」

実環は立ち上がり食指をビシッと夕月に突きつけた。

「全国巡回中、私は移動車の中で寝泊まりするわっ！！」

「えっ、実環ちゃんちよつとマジ…！？」

「ほーう。んじゃ、やれるもんならやってみな」

「ええ、やってみせようじゃないの。西岡さん、そういうことで私の部屋は用意しなくて結構ですから」

大と偉世はどこから指摘すればいいもんかと、悩んで結局どうにもできなかった。

それは西岡も同じだったが、頭の中では別なことを考えていた。

（…実環ちゃんの部屋…振り付け師の立花ちゃんタチバナとツインにしておくか…一応）

1日目。

「みいみい」

「あれ？」

実環はホテルからロケバスへ（風呂とトイレだけはホテルで済ますことにした）移動中、箱に入った子猫を見つけた。

どうやら捨て猫らしい。

「可愛い〜白猫」

「みいみい」

昔の某CMではないが、そのキラキラ何かを期待するような瞳に、実環は負けた。

（…私の生活も、この仕事のお陰でだいぶ楽になったし…子猫の1匹くらい、いいかな…）

「…お前、うちの子になるか？　おい」

「みいみい」

「そっか。おいで」

実環は子猫を抱き上げた。

「一緒に帰る」

…その晩、1人と1匹は移動車の中で眠った。

2日目。

「可愛いですねー白猫！」

移動中の話題は、もっぱら実環の拾った猫に集中した。

「名前はもう決めたの？」

猫と遊ぶ偉世を横目に、実環は大の問いに答えた。

「はい。みいみい鳴くので、みいちゃんにしました」

「ぶっ…変な名前…」

こんな憎まれ口を叩くのは1人しかない。

「成瀬くん？　ひとがどんな名前つけたっていいじゃない」

「だったらもつとセンスある名前にしろよな」

しかしここは多勢に無勢。

飼い主様のご機嫌をそこねた夕月は、鋭い猫パンチをお見舞いされた。

夜。

「じゃあ私たちもそろそろ寝よつか」

そのとき、後部座席のドアがガラツと開けられた。

「…な…」

実環の声が『な』で止まってしまったのは、その客が意外な人物だったからだ。

「成瀬くん！？　なんであんたがここにいるの！？」

「昼間の復讐しに来て何が悪いんだ？」

どこもそこも悪いわ、と思いつつ、実環は夕月の様子を見守った。

案の定、夕月は猫の尻尾を掴んで逆さまに宙吊りした。

「み〜い」

「ぎゃー成瀬くん！　あんたなんてことするのよ！？」　可哀想にも

程があるわ!!」

実環は猫を奪取すると、可哀想にねー、と膝の上でナデナデした。

「……………」

夕月は帰らずにその様子を見てると、不意にみいちゃんと名付けられた白猫に手を伸ばした。

「あああ!？ またあんたそーやって…」

しかし今度は意地悪せず、腿の上から座席に退かしたけだけだった。

「？」

「はい、交代」

そして今度は実環の太ももに頭を乗せる。

「なっ、なっ、な…!？」

「いーだろこれくらい…疲れてるからさ…」

だったら帰れ、と言ってやりたかったが、その本当に疲れた様子に、実環は文句を言う気も失せた。

しばらくそのまま長い沈黙が流れ…。

「…なあ」

不意に、夕月が目を閉じたまま口を開いた。

「里崎の親って、どんな奴だ？」

なんでそんなこと、と思いながらも、実環は分かる限り答えてやった。

「…私の親は慈善家で、世界中あちこち飛び回ってるの。だから私んちはいつも私1人だけ」

「…あとは？」

「昔、ちょっとだけ音楽をやっていたわ」

どうりで、と夕月は唇を歪めた。実環のあの音楽性は一部分血か。

「成瀬くんの、ご両親は？」

「…夕月だろ」

「え？」

夕月は半分目を開けた。

「下の名前で呼べよ…。大さんと偉せつちはそーなのに、不公平だろ」

「不公平って…」

そっという問題じゃないだろうと思ったが、なるほど、よくよく考え

てみればそんな気もした。

「じゃあ夕月くん。…あなたのご両親は？」

夕月は腕を額に当てて答えた。

「親父は借金苦で病院行き」

実環は愕然とした。

「…お母様は？」

「おれが小さいときに、男と逃げた」

「…そんな…」

実環は、そういう家庭というのは、小説やドラマの中のものでしかないと思っていたので慌てた。

「…ごめんなさい…」

「なんでお前が謝るんだよ」

「だって…」

「中2の頃だったかな。ダチがさ、勝手におれをオーディションに応募しやがって、俳優業やることになったんだけど。いま思えばあれが救いだっただのかもな」

「…ねえ」

「なんだ」

実環は絞り出すようにして言った。

「私のこと、『実環』で呼んでもらってもいい？」

「…なんで」

「…なんとなく」

嘘だった。家族の愛情に恵まれていない彼の、少しでも家族のような相手になってあげたいと思ったからかもしれない。

「…嫌なら、べつにいいけど」

「……。…いいよ……」

実環。

そう言って夕月は実環の膝枕で寝息を立て始めた。

3日目。

「今日で最後だ。みんな、気合い入れて頑張るように」



「はいつ！」

返事をしたその時、実環は喉の異変に気がついた。気休めに咳払いする。

「実環ちゃん？ どうしたの？」

「だいじょう…、！？」

実環は口を押さえた。

「実環ちゃん？」

実環は首を勢いよく振った。

…声が出ない。

## タンジェリン・ヴォイス（7）

（…どうしよう…声が出なくなっちゃった…！）

今日がツアー最終日なのに。

「初夏とはいえ、車で寝泊まりしてたからなあ」

「かかか感心してる場合ですか西岡さんー！」

偉世が慌てた様子で言う。

「どうしますか。このままでは今日の公演は中止…」

「そんなこと出来るわけないだろー！？」

「でも実環ちゃんが声を出せなくなったのなら…！」

「……………」

「……………」

数秒間の沈黙。

「…………。あの」

それを突き破ったのは、夕月だった。

「なんだったら、おれが歌いますよ」

.....  
.....  
.....

それは新たな沈黙を呼んだ。

「...え...」

えええええーっ!?

「無理！ 絶対無理ですから！」

「考え直せ、夕月」

「そもそも自分の力量を分かってて言ってるのか!？」

続けざまに偉世、大、西岡から反対コールが起こる。実環も首を勢いよく横に振った。

まさか!？ あの夕月が歌うつて言った!？

ゴジラやガメラにも負けているあの夕月が!？

しかし夕月は俳優然とした態度でニツと笑った。

「分かってないなあみんな。おれの本業は歌手じゃなくて、俳優なの。アタマアタマアタマ、ここ使わないとね」

「……………」

「……………」

「……………」

しかしコンサートを中止するわけにはいかず、結局は夕月の案にするしかなかったのだ。

（…本っ当でしょうね…何か策があるのかしら…）

冗談じゃない。策も無しに歌を披露しようものなら、お客さんドン引きしてしまう。

悪足掻きにつがいやのど飴など色々試してみたが、やっぱりダメだった。

もうあとは夕月の演技力に頼るしかない。

「今日お集まりの皆さん」

大。

「僕たちのために来てくれてありがとう」

偉世。

「それでは、聴いてください」

夕月。…心なしか声が掠れてるような…。

「…期待は裏切られるためにある…夢は破られるためにある…そんな悲しいこと言わないで…また夏はやって来る…」

3人で歌うパートだ。

そのところは、まあ問題はない。ツアーの疲労もあることだし、大と偉世に任せておけば、ロパクでもなんとか誤魔化せる。

問題は夕月のソロパートだ。曲の終盤に用意されている。さすがにそれはロパクで誤魔化せないだろう。

「…うー…」

実環は居ても立ってもいられず西岡に詰め寄った。ヒソヒソ声ならなんとか出せる。

「あああもう見ていられませんか！ 私にマイク持ってきてくだ

さい！」

「えー!? だって実環ちゃんその声じゃ…」

とかなんとか言ってる間に、夕月のソロパートに突入した。

(ぎゃー! 嘘ーっ!)

どうするどうなるソロパート!?

ふと、夕月がセット裏にいる実環に目配せした。

「…え…?」

「さあ皆さん!一緒に!」

そしてマイクを観客席に向ける。マイクパフォーマンスだ。

「希望は戒めるためにある…愛は棄てられるためにある…そんな悲しいこと言わないで…もう一度やってみよう…!」

「……………」

なんと自分の代わりに観客に歌わせたのだ。

「ありがとう!」

アタマ使うつて、これかい。実環はちょっとガクツと来た。

(…まあ、機転がきいてるっちゃきいてるけどね…)

「…また夏はやーってー来るからー」

そして歌は何事も無かったかのように終わった。

途端、観客席から『きゃー』という声があがったのは言うまでもない。

誰かが言った。

大成功だ。

「大成功だ!!」

「3人にインタビューを!!」

ステージ裏にいた実環はマスコミ関係者にドンと突き飛ばされ、次に目を開けたときには、ばんぺいゆ3人は取材を受けていた。

「……………」

…ああ、そうか、と実環は思った。

（生きる世界が違っんだ…）

夕月はみんなのアイドルで、自分はゴーストシンガー。

舞台の光と闇に生きる者。

『実環』

夕月にその名を呼ばれるのは、昨日の夜以来で、改めて思い返すとなんだかヘンな気分だった。夕月の方は百万回でも呼んでいたかのように偉そうだったけど。

『実環』

もう一度、思い出した実環だったが、ぶんぶん頭を振って追い払った。

（さーて。私も早く喉を治さなくちゃ）

仕事のために。

「…驚きましたね」

調査書を見て、ばんぺいゆのマネージャーと、夕月の所属している芸能事務所の女社長は苦笑した。



「里崎実環の身元といたら…」

「…歌のことといい、驚かされてばかりね…」

「どうですか」

女社長は実環を見て薄く笑った。

「…私にいい考えがあるの」

…数カ月後。

季節も変わり、ばんぺいゆの新曲レコーディングも終わり、今日も今日とて舞台裏でゴーストシンググしていた。

いつもならここで仕事終了なのだが、今日は勝手が違っていた。

「実環ちゃん」

呼んだのは夕月の芸能プロの女社長だった。

「あ、社長さん」

「ちょっと来てくれない」

.....。

「はい？」

「はい、出来上がり」

実環は何が何だか分からなかった。

服を着替えさせられ、メイクをされ、髪をセットされ、さながら芸能人みたいな姿になっていた。

「良いわ良いわ！ 私の思った通り！！」

「？ あの…これは、一体…」

女社長は満面の笑みで答えた。

「実環ちゃん、ステージに立ちたくない？」

「えっ！？」

…歌うことが何より好きだった。

いつか人前で歌いたいと思っていた。

「そりゃ…」

夕月のいる世界に？

「でも私なんかムリ…」

「いいえ、行けるわ！ スポットライトの下に！」

女社長は実環の肩をガシツと掴んだ。

「西岡嶺文のプロデュースで、里崎実環、貴女は歌手デビューするのよ！！」

## タンジェリン・ヴォイス（8）

デビュー曲が初登場売上1位を記録しました。

「これも実環ちゃん。こっちも実環ちゃん！ 音楽雑誌はどこも実環ちゃんの記事ばかりだね」

デビュー曲が月9ドラマの主題歌に抜擢さ（れるよう裏から根回し）され、視聴者からの問い合わせが殺到。

有名な西岡嶺文のプロデュースということもあり、ラジオやテレビの出演依頼も舞い込んで、里崎実環は一躍時の人となった。

「さすが夏ちゃんと凛ちゃんの娘だけあるね。カリスマ歌手だってさ、すごいね」

「…すごくないですよ」

実環は溜め息混じりに言った。

「今まで学校でやったことがメディアになっただけ。それでカリスマ歌手だなんて、芸能界って変なところ…」

西岡は頭をボリボリと掻いた。

「…で、実環ちゃん…ばんぺいゆの仕事の方は…その…来てないみ

「ただね…」

言っではいけなかった、と気付いたときには遅かった。

実環は目を潤ませると、西岡の胸元にガシツと掴みかかった。

「そおおなんですよおおおお！お互い忙しくてすれ違いばかり  
！！」

特に夕月など新ドラの仕事（主演）が舞い込んで、文字通り寝る間もない忙しらしい。よって“ばんぺいゆ”歌手活動はひとまずお休み中。

「収入は増えたけど自由がない！夕月くんに会いたいよーお」

「ちょ、ちょっと実環ちゃん。声が大きいって！」

一方その頃。

「成瀬くん成瀬くん」

夕月はイライラしながら写真撮影に挑んでいた。

「なんスか？」

「もっと笑顔つくつてよ。俳優でしょ？ キミは」

「…こーですかっ？」

夕月は、殺人快楽者が血を見たような笑顔を作った…。

「マネージャーさん」

「す、すみませんっ！」

《会えないのがこんなに苦しいなんて…》

『3分偉人伝』の収録後、大がにこやかに訊いてきた。

「その様子だと、実環ちゃんに嫌われた？…ぶっ」

大は顔に音楽雑誌の開いてる面をお見舞いされた。

「うるさい！ 振られた方がまだマシです！！」

「…ですよね…」

偉世がその音楽雑誌を拾い上げた。

「実環さん、このごろ人気爆発ですもんね。気持ち云々以前に会えない、か…」

「おい。渡辺、唐川、成瀬」

そこに西岡が入ってきた。

「あ、西岡さん。どうもお久しぶりです」

「聞いて喜べ。近いうちに“ばんぺいゆ”新曲レコーディングだ」

「えっ!？」

途端に夕月の顔がパツと輝いた。

「それって、あの、実環も来るってことですか？」

「当然だろう。お前の歌声なんかレコーディングできるか」

ひゃっほう! とテンションが急上昇する夕月。

その様子に3人は呆れた溜め息をついた…。

実環のケータイから『晚白柚』が流れる。メールではなく、電話だ。

(誰かしら…って、夕月くん!?)

と、実環は辺りを見回した。うつかり電話に出てスキャンダルにでもなったら困る。

「どうしたの? 一体」

「聞いてるか？ 新曲レコーディングの話」

「ううん。新曲？ 本当！？」

実環の声が嬉しげになる。

「嬉しい…久々にみんなに会えるのね」

大さん、偉世たち、…夕月くん。

「…ああ…」

「実環ちゃん、本番です」

「あ。はい！ じゃ夕月くん、またね」

プツッ。ツー、ツー、ツー…。

「成瀬、そろそろドラマの収録に…」

電話が切れたところを、夕月のマネージャーは見てしまった。

「成瀬！ 誰と話してたんだ！？」

「誰だっていいだろ」

「……………」



（やっと会える…夕月くんに会えるんだ！）

「実環ちゃん今日は元気一杯ですねー」

「そんなことないですよー」

「……………」

その夜、またしてもマネージャーと女社長の密議が開かれた。

レコーディング当日。

「おはようございまーす」

「おはよう。ずいぶんご機嫌ね」

「だって久々にみんなと会えるんですもん」

「…それは残念ね」

「え？」

女社長は無感動に言った。

「夕月は今日、朝からドラマの収録よ」

実環は、自分の足元が底抜けになった気がした。

「……ど……」

力を振り絞って女社長に食って掛かる。

「どうしてですか！？ 夕月くんは“ばんぺいゆ”の……」

「彼はそれ以前に俳優なのよ……！」

ケータイを出して、と言われ、実環は持っていたケータイを差し出した。

「……これが貴女の新しいケータイよ。これからは直々に私がマネージメントを勤めます」

「……！ 社長が……！」

「貴女はひとりの歌手なのよ！ さあ、急いで」

腕を引っ張られながら、実環は涙を堪えるのが精一杯だった。

「どーゆーことだよマネージャー!!」

夕月は、車の後部座席からマネージャーに文句を言った。

「今日は“ばんぺいゆ”のレコーディングが…!」

「お前はひとりの役者なんだ!…ケータイを出せ」

「……………っ」

夕月は渋々ケータイの交換に応じた。

「自業自得だろう。…お前の自覚の無さがこの結果を招いたんだ。お前は役者だ、忘れるな」

…こうして、2人は別たれたのだった。

## タンジェリン・ヴォイス（9）

「どういつことだ！ 実環が歌手デビューしてるなんて！！」

久方ぶりの電話の相手の、第一声がこれだった。

「そりゃ子供を放り出してる俺たちも俺たちだが、親の承諾ぐらい得ろってんだっ。だいたい、みっちゃん…嶺文！ 知っててなんでこんな…」

「だって面白そうだったんだもん」

相手は、電話越しにずっとけた。

「とにかく明日にでも帰国する！実環にもそう伝えておけ！！」

ガチャッ。ツー、ツー、ツー…。

「…おはようございます」

西岡はケータイを閉じて溜め息をついた。

「実環ちゃん…バレたよ。ご両親に歌手デビューの件」

「え！？」

「…明日にでも帰国するってさ」

うそ。

「うわーん。怒られるーう」

「心配しないで。僕あ実環ちゃんの味方だよ」

ただ夕月と一緒にいたかっただけなのに…。

（なんでこんな立て続けに問題が起きるのー！？）

ターミナルを取材陣が埋め尽くしている。

「おい、出てきたぞ」

現れたのは、一組の夫婦だった。

「あれが“ハーメド”の元ボーカル、サトザキ・ナツミ里崎夏実だ」

「隣にいるのは“ハーメド”の元ギタリストで奥方のマシタ・リン萬田凛…」

集まった取材陣の数を見て、夏実はあからさまに眉を潜めた。

「テレビ局の皆さん…それに新聞各社の皆さんも…。…何事ですか、この騒ぎは」

「お二人に、お訊きたいことがあります」

一番手前のインタビューがマイクを向けた。

「歌手の里崎実環ちゃん……いやー驚きましたよ」

「……………」

「彼女、お二人の一人娘だそうですね」

一方その頃。

「おはようございまーす」

「ねえ聞いた！？ 実環ちゃんの話！」

『3分偉人伝』の収録前、ばんぺいゆ3人は女性スタッフの声に足止めされた。

「！ 実環がどうかしのか！？」

「まさかと思っただけどやっぱりよねー」

「うんうん。驚くより先に納得したわよ」

ばんぺいゆ3人はお互いに顔を見合わせた。

「実環ちゃん、『奇跡の歌声を持つシンガー』里崎夏実の娘なんですって」

実環が喫茶・歌音にて、事の経緯を話し終わると、夏実は深い溜め息をつけて目を覆った。

「…これまでのことはよく分かった…だがな…実環」

ハーメドは17年前に結成されたバンド。

ボーカル『Natsu』こと里崎夏実、ギター『Linn』こと萬田凜、キーボード『Mine』こと西岡嶺文、ドラム『Hachi』こと大村八作、ベース『Suda』こと須田千歳<sup>スタ・チトセ</sup>で結成されていた。

ところがベース『Suda』の急死によりバンドは解散。

活動1年半という短い間だったが、その間数々のヒット曲を世に送り、今なお語り継がれている伝説のバンドだ。

「その娘が西岡嶺文のプロデュースで歌手デビューしちまったら、騒ぎになるのも当然だろうて!!」

「…はい…」

「まあまあ落ち着きなよ夏ちゃん」

タイミングよく、元“ハーメド”のドラマー現喫茶店のマスター、大村がカフェラテを運んでくる。

ちなみにマスターの計らいで店頭には『CLOSE』の札がさがっているので、店内には彼等以外に客はいない。

「でもこのお仕事はお父さんの慈善活動には関係ないのに」

「これから関係してくるから怒ってるんだ!!」

「え？」

ハッと、夏実は口をつぐんだ。それからブンブンと首を振る。

「とにかく！ 今すぐその芸能事務所から離れろ!!」

「!？」

そんなことをしたら、もう二度と人前で歌えなくなってしまう。

それ以前に、夕月との接点が無くなってしまう…。

「いや！ 私、歌手やめない!!」

「うるさいっ!!」



実環はビクツと身を縮こませた。

「今から事務所と話をつけてくる！ それまでここから出ることは断じて許さん！ 凜、こいつを頼む」

そう言い残して夏実は出て行ってしまった。

「実環…」

凜は実環にそつと呼び掛けた。

「どうしたの？ 実環。実環は芸能界なんて興味なかったでしょ」

「……………」

「黙ってないで話してごらんなさい」

でないと、と凜は続けた。

「お母さん、実環の応援も協力もできないわ」

「…お母さん…！」

実環は瞳に張った涙を拭うと、冷めかけたカフェラテを一口飲んだ。

「…お父さんには内緒よ…？ あのね…」

「どうぞお掛けください」

夏実は女社長に言われるまま、ソファ一席に腰掛けた。

「どうも。娘がお世話になってます」

女社長はニコニコと応答した。

「今回来たのは、娘を貴社から引退させたく…」

「構いませんよ」

意外な反応に、夏実は目を見開いた。

「けれど私、こんな情報を持っていますの。…貴方が活動を行っている『タンジェリン・リボン』のキャンペーンとして、一夜限りの“ハーメド”復活ライブを催すそうですね」

「!?!? なぜそれを…それはまだ極秘情報で…」

「実環ちゃんのことを調べてるときに、偶然ですわ」

早い話が…と女社長は笑みを作った。

「ハーメドの復活ライブに夕月たち“ばんぺいゆ”を、スペシャルゲストとして参加させて頂きたいのです」

「……………!」

「…悪い話じゃないでしょう?」

「……………」

夏実はしばらく黙ったままだった。

## タンジェリン・ヴォイス（10）

ばんぺいゆは、この1年限りで最後となる。

活動休止イベントをどうしようかというとき、3人の前にある人物が現れた。

「お前らが、 “ばんぺいゆ” とやらか？」

「…そうですね…。マネージャー、この人だれ」

夕月の失礼な問いに答えたのは、マネージャーではなく目の前の本人だった。

「里崎夏実。実環の父親だ」

「!？」

「…この人が夕月くん？」

「そう」

2人は店内に置いてある音楽雑誌から“ばんぺいゆ”の記事を見つけ、女子高生みたいにはしゃいでいた。

「ふうくん、なかなかのイケメンじゃない」

「あ、お母さん。顔だけだから力オだけ。中身は超高飛車我儘オレ様主義の何様だ男だから」

凜はプツと吹き出した。…ここまで言われるとは…。

「で、この人のゴーストシンガーやってたのね？」

「そうよ。ツアー中には声が出なくなるし、大変だったんだから」

でも楽しかったなあ…実環は腕に顔をうずめた。

「実環？」

「…戻りたいなああの頃に。夕月くんの側で歌っていたい。うっん、いつそのこと…」

実環は息を調えてから続けた。

「すき、って一言だけでも、伝えたいな…」

「…実環…」

母親は気持ちを悟った。これほど淋しげで愛情溢れる声でありながら、全くと言っていいほど恋情が見られない。まあ、それも簡単なスイッチひとつで変わるだろうが…。

凜は目を伏せると、分かるわ、と言こぼした。

「私も実環と同じ歳のくらいとき、同じ想いをしたの」

「？ それって？」

「夏ちゃんに出逢ったんだよ」

クッキーを置きながら大村が割り込んでくる。

「だからお父さんがあれだけ言うのも、実環を心配してのことなのよ。分かってあげてね。だからその分……」

凜と大村は目を合わせて、ぐっと拳を握り締めた。

「お母さん達が力になってあげましょう！」

（！ お母さん……）

「あ！ 凜さん……！」

凜は、SP2人に挟まれて喫茶・歌音から出てきた。

「お出掛けですか？」

「ええ。ちよつと実家まで里帰りに」

そして悠々と車に乗り込む。SP2人は報道陣を抑えつつ後部座席に乗る。

「質問なんですが、実環ちゃんの…」

「失礼」

そして車を発進させた。

「……。…実環、もう大丈夫よ」

SP…否、実環と大村は帽子、サングラス、マスクを外した。

「あー息苦しかったあー!!」

「お母さんにできることは、ここまでね。あとは自分の力で頑張っ  
て!」

凜は降りると、運転を大村に代わってもらい、再び走り出す車を見送った。

「ありがとう! お母さん!」

実環は窓から見えぬよう、後部座席に横になった。

このままウジウジしていても何も変わらない。

伝えよう。自分の気持ちを真っ直ぐに。

「…で」

夏実は刺々しい声で訊いた。

「成瀬夕月ってのは、どいつだ」

「あ。おれです」

大は偉世を引つ張って2、3歩あとじさった。

夏実の手が夕月の耳に伸びる。

「貴様か！ 実環を！ 芸能界に誘い込んだ張本人は！！」

「いでででででで！！」

耳から手が離れると、夕月は遠くにいる西岡に視線を送った。

「正確には西岡さんも同罪で…」

その瞬間の夏実の顔を見てしまった西岡は、真冬だというのにびっしり冷や汗をかいた。

「…でも、お父さんも気付いてるでしょ？」



夏実は視線を夕月に戻した。

「実環にはあれだけの歌唱力がある。その気がなくても誰かに目を付けられて、いずれは人前に出てきてますよ」

「っ、ああ知ってるさそんなことは。まがりなりにも実環の父親だからな」

「さっすがお父さん」

「お父さん呼ばわりするな！ 貴様に『お父さん』なんて呼ばれる筋合いは……！！」

「だつて」

「なんだ」

「おれ、実環のこと、好きなんです」

……。  
……。  
……。

……夏実はあんぐりと顎を外した。

「ゆ、夕月…」

「場の空気ちゃんと読んでますか…？」

「おれたちが結ばれたら、夏実さんは義理のお父さんじゃないっすか」

なーるほど、とそこに笑い声が響いた。

しかし束の間。

夕月の肩がガシツと掴まれたと思うと、目の前には鬼の形相をした夏実の顔があつた。

「ふざけんなよ成瀬夕月くん。おぢちゃんはそのーゆー冗談は大っ嫌いよ？」

「うんにゃ。大真面目っす」

夕月はキツパリと言った。

「貴様、それがどういうことだか分かってるのか！？ その言葉を公衆の前で言ってみろ！ 実環ともどもボロボロになるんだぞ！？」

夏実は食指をビシツと突きつけた。

「もちろん人気も仕事もパアだ！ 親としてはそんな奴との交際は認められない！！」

「……。そうかもしれません。けど」

夕月は、俳優だからこそ可能な男前の顔と声で宣言した。

「おれは一挙両得を目指します」

夏実の指が僅かに下げられた。

「……実環に会うまでのおれは、与えられた仕事を適当にこなすだけの、怠惰な俳優だった。でも、実環と出逢って変わったんだ」

実環は教えてくれたのだ。1年にも満たない間に。働くということがどういうことなのか、仕事とはそもそも何なのか。

「仕事の代わりに実環を失うのも、その逆も嫌だ。どちらも大切だから、おれは両方手に入れる」

「……………！」

「……………」

「……見せて貰おうじゃないか」

夏実は静かに言った。

「俺が活動してる『タンジェリン・リボン』のキャンペーンとして、一夜限りの“ハーメド”復活ライブを催す。そこに“ばんぺいゆ”の活動休止ライブを行ってもらおう」

「えっ」

「僕たちが…」

「“ハーメド”と同じ舞台に？」

「嶺文にはすでに許可をとってある。ただし俺は公私混同は嫌いだ。貴様はプロの歌手を演じられるか？」

夕月は少しの間だけ、沈黙した。

そして毅然とした態度で。

「…はい。演じてみせます」

言い切った。

と同時に、楽屋の扉がパーンと開かれた。

「みんな！…って、え！？」

実環は思いもよらぬ人物がいることに涙が出そうになった。

「なんで！　なんでお父さんがここにっ！？」

「実環…」

父親は、娘に平手を打っていた。

「これから忙しくなるっのに、自覚しろ！」

「なっ、何よ忙しくなるって……」

「お前はシンガーソングライターとして再デビューするんだ」

……。

「ええっ!？」

「詳しいことは後で話す。帰るぞ、実環」

「夕月くん」

実環は夕月に紙を渡そうとすりよった。

「実環、早く来い!」

「これ、私の新しい電話番号とアド。話があるの。お願い」

「……………」

夕月は紙を突っ返した。

「…返す」

「夕月くん？」

「お前とはもう話さない」

「!.....」

(夕月くん...)

実環は、自分の心の一部が壊れていくのを感じた。

## タンジェリン・ヴォイス（11）

舞台裏は、戦場と化していた。

裏でこっそり様子をうかがっていた凜は、表の様子に思わず息を呑んだ。

「ものすごい数の観客と報道陣ね…」

「うちの商品の実力がお分かりになって？」

ホホホホホ、と女社長が笑う。ちゃっかり手まで宛がっている。

「6番の靴がありません！」

「あ、こっちにあり…きゃっ!？」

駆けしてきたスタッフに肩を押されて倒れこむ実環を、誰かの腕が受け止めてくれた。

「!」

「セーフ」

大、偉世、夕月が同時に声を出す。

「あ、ありがとう」

「どこへ行っても裏は戦場だな」

「うん、でも頑張る。今日がゴーストシンガー最後だもん」

そう…。夕月とキツパリお別れするために。

「あつ、他人事みたいに！ もうこんな時間よ、準備しなきゃ」

「おっと、いけね」

「最後の最後でトチったら承知しないからね！」

「おう、任しときな」

実環は軽く手を振った。

“ばんぺいゆ”が前座で“ハーメド”が2番手だ。

最後の新曲を歌い、デビュー曲を歌い、メドレーを歌って、ばんぺいゆのラストライブは終わった。

「では、今日の主役をご紹介します。あの伝説のバンド、“ハーメド”のみなさんです！」

大の紹介に、ばんぺいゆは静かに舞台を下りた。



「お疲れ様でした」

「次、実環さんですね。緊張してます？」

「ううー、緊張するう」

実環はライブの最後に、シンガーソングライターとして再デビューすることを発表することになっている。

初めて自分で作詞作曲した歌を披露するのだ。

「じゃあ、その緊張をほぐすために、楽屋に来ませんか？ 面白いものを見せてあげますから」

夕月はロッカールームへと直行してしまい、楽屋には大と偉世と実環だけがいた。

「あれ、これ、首輪？ どなたか猫でも飼ってるんですか？」

「いいえ、と偉世は首を振った。

「これ、みいちゃんにあげるんだって、夕月さんがわざわざお忍びで買ってきたものなんです」

実環は今度こそ目を丸くした。…みいちゃんに…？

首輪は白猫に映えるような赤で、古い漫画でしか見ないような金の鈴が付いている。

「夕月の行動を知って、納得しました。だから、僕たちは貴女が夕月にとって特別な人なのかなと思ったんです」

夕月が実環の父親の前で告白したことは、本人が卒倒しそうだから言わないでおく。

「…貴女は、夕月がどんな暴言を吐いても、プンプン怒りながらも受け入れていたでしょう。夕月に必要なのは、きっとそういう人なんです」

「え？」

「どんなことをしても、決して嫌いにならない人。傍にいてくれる人。許してくれる人。何をしても許してくれて、絶対に好きでいてくれる人」

実環は夕月の我が儘に、黙ってわけではない。プンプン怒って、言いたい放題言っつて、そして最後は許してきた。

「夕月さんを、どうかよろしくお願いします。あんな性格なのも、母親に愛されず父親に頼れなかったせいなんです」

「それは…知ってるけど…」

「でしょう？…そうやって、実環さんは夕月さんを理解してるじゃないですか。…両親に甘えられなかったから、夕月さんはどんな無

茶も我が儘も甘えもきいてくれる人を、必要としていたんじゃないですか」

大が長く嘆息した。

「夕月は、確かにどうしようもない男です。あんなどうしようもない男を受け入れられる女性なんて、絶対いません。どんなに心の広い女性でも、3日で出ていくに決まっています」

「…私、お母さんじゃないんですよ。それにあの高飛車我儘オレ様主義の何様だ男と一生付き合えていうんですか。もれなくドン底の人生が付いてくるのに」

大と偉世は言葉に詰まった。それを言われると痛い。

「ででででも、嫌いじゃないでしょう?」

「嫌いですよ。大っ嫌い。あんな男と一生付き合えなんて冗談じゃない。ソツとする」

実環は首輪を返して立ち上がった。

「もう行きます。どのみち夕月くんに嫌われちゃいましたから、そんな話しにやりません」

ぷいっと、実環はステージに向かった。

「…それでは今回の影の主演を紹介しまーす」

ジャジャン、という音と共に西岡が声を張り上げた。

「今回のキャンペーンソングを作ってくださった、シンガーソングライター里崎実環〜！」

ギター1本で現れた途端、観客席から『きゃー』という興奮が怒濤のように押し寄せてきた。

「…みなさん。今日は当ライブに来ていただき、ありがとうございます。新人のシンガーソングライターでありながら、最初からこんな大きな仕事を貰えて感激です」

実環ちゃん、という声に彼女は手を振る。

「…私は歌が好きですし、それは今も変わりません。ただひとつだけ、私を変えたものがあります」

観客席が水をうったように静かになる。

「…『元気』…です」

元気は私にいろんなことを教えてくれました。楽しいことや、辛いことも…。実環は続ける。

「そんな『元気』が皆様にも届きますようにと、この曲を書きました」

曲名は…と実環は調律をしながら言った。

「『Tangerine Voice』…元気を色に例えたら蜜柑色だと思ったからです。…それでは、お聴きください」

そしてギターをかき鳴らす。

「…おコタで蜜柑…素敵な幸せ…隣には貴方…」

あれ？ と観客のひとりが首をかしげた。

「この声…夕月に似てる」

「そう言われてみると…」

「あ、私もそう思った…」

「なにこれ…デジャブ？」

「lu lu lu la la…tangerine voice  
e…今すぐここに届けてよ…lu lu lu la la…ta  
ngerine voice…貴方の素敵な声で…」

会場は、疑問と拍手に満たされた。

こうして里崎実環の、シンガーソングライターとしての初ライブは幕を閉じたのだ。

## タンジェリン・ヴォイス（12）

ライブは無事に終わり…。

実環はすぐに帰れるよう、荷物の整理をしていた。

「実環ちゃん」

と、スタッフのひとりに声をかけられた。

「急いで。打ち上げ始まっちゃうよ」

「あ、ハイ」

当然、打ち上げに行こうと楽屋の扉を閉め、踵を返した途端…。

ぎゅっと、腕を掴まれた。

（…え…？）

誰だろう…反射的に振り返ると。

「夕月くん…」

「…どこ行くんだよ」

「どこって…打ち上げ」

言っと、夕月は面白くなさそうな顔をした。

「ついてこい」

「ついてこい、って、ちょ、ちょっと待って…」

「待たない」

すると、夕月は実環の身体を軽々とお姫様だっこした。

「ばっ、なにすんのよ!」

「おれの首に腕をまわせ。…暴れるな。全速力で走るから、暴れた拍子に唇がぶつかかるかもしれないぞ」

すると、実環は凍りついたように大人しくなった。

夕月はチッと舌打ちした。

「…そこまで厭がることないだろ…」

…実環と夕月はこうして会場から去った。

「遅いな、夕月たち」



馬鹿正直に夕月と実環を待っていた面々だったが、そこに夕月のマネージャーが駆け込んできたことで表情が一変した。

何かあったのだ、と。

「失礼します…夕月が、里崎さんのお嬢さんと逃げました」

……。

「はああああ!？」

「私も追いかけたのですが、行方が分からず…。ファンにも見付かって、いま外は大騒ぎになってます」

「すみません! と勢いよく頭を下げるマネージャー。これに反応したのは、実環と一番関係の深い人物だった。

「…はあ…頭痛のタネが増えそうだ…」

西岡と大村は顔を見合わせると、それぞれ持っていたグラスを夏実の持つグラスにカチンとぶつけた。

「いいかげんに折れなよ、夏ちゃん」

外は雨が降りだしていた。

喫茶・歌音。

マスター大村が不在のため鍵がかかっていたが、入り口には雨よけにはなるくらいの屋根が付いていた。

夕月と実環はそこまで逃げていた。路地裏の喫茶店（休業中）ならまず見付かるまい。

「あゝあ、こんなに濡れちゃって…」

実環は持っていたハンカチで夕月の顔を拭いた。ハンカチが前髪に差し掛かったとき、くすつ、と実環は無意識に笑ってしまった。

「…なんだよ」

「いや。やっぱり、夕月くんの顔は好きだなあ。歌は全然だけど」

「ゴーストシンガーに言われたくない」

「だって歌ったらバレちゃうじゃん。お父さんの声に似てるって西岡さんにも言われたし。ハーメドのボーカルとギタリストの娘なんてバレたら、今回みたいな大騒ぎになっちゃうもん」

だから、人前で歌いたくても、歌えなかった。

あの結婚式で歌わなければ、彼女のステージはカラオケボックスだけ。

「…大さんと偉せつちには夕月くんのこと、大嫌いだって言ったけ

ど、ホントは嫌いじゃないよ。でも私は夕月くんのお母さんじゃないの」

「はあ？ キシヨイこと言うな。お前を母親だなんて思ったことはない」

「まあなんでもいいよ。でもそうねえ、1度くらい言ってあげてもいいかな。『分かったよ。傍にいればいいんでしょ。しょうがないからずっと一緒にいてあげるよ』って」

夕月は目を瞬いた。

「今さら何があつたって、ちゃんと好きでいてあげるよ。ハッキリ言つて私の中で、夕月くんの評価はドン底なんだよ？ それでも好きでいてあげてるんだから。…知ってる。そーやって夕月くんの傍にいたことは、私には難しくないんだってこと」

「じゃあやれ」

「最後までエラソーねあんたは！何よ今さら。話があるって言ったのにアド突っ返すし」

「あれは…っ！」

夕月は言葉に詰まり、それから真実をポツポツと語り始める。

「お前の親父さんと…約束…ライブが終わるまで、公私混同はなしで、プロの歌手に徹しろって…」

意味を悟った実環は真っ赤になった。2人は同時に視線を逸らし、

互いに話題を棚上げにした。

「しかし…タンジェリン・ヴォイスねえ」

「…何よ。なんか文句ある？」

「いや。おれにピッタリだなあと思って。言わなかったっけ、おれの本名」

「…言っていない」

「ナルセ・ユズキ  
成瀬柚樹ってんだ」

実環はぽかんと口を開けた。

「…ナリセ・ユズキは、芸名だ」

2人は互いに黙ったままだったが、やがて顔を見合わせてクスクス笑った。

「…さっきの言葉、取り消すわ」

「なに？」

実環は疲れきったように夕月に身を預けた。

「大好きよ。夕月くん」

染まってゆく。

世界が、大好きな蜜柑色に。

オレンジ色した街灯に照らされて。

2つの影は雨の中…ひとつに、重なった。

…数日後。

「ええーっ」

実環は夕月の言葉に不満な声をあげた。

「仕方ないだろ。『3分偉人伝』でも活動休止ライブやるって、おれだって急に言われたんだから」

「そんなあ。夕月ちゃんと初めてのデートだったのに…」

ふと、バッグを持っていない方の手を夕月に握られる。

「行くぞ」

「うんっ」

…デートの続きは、ステージの裏で。

了

タンジェリン・ヴォイス（12）（後書き）

「變讀ありがとうございます。」

三（——）三

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5576j/>

---

Tangerine Voice

2011年4月9日09時47分発行